

# 市長室から



宇城市長 阿曾田 清

## 市誕生から3回目の師走を迎えて

年の瀬も迫り、何かとおいそがしい日々をお過ごしのことと存じます。11月は実りの秋にふさわしくバラエティーに満ちた月でした。

伝統文化芸能まつり、各地区における文化祭、健康づくりフェア、食とモノの祭典、環境フォーラムなど、市政スタートと同じ3回目を開催したところです。市民の皆さまの旧町意



不知火町の文化祭

識の垣根を越え徐々にですが、一体感が醸し出されてきている感じがします。

また、行政を推進する中、変化が表われてきているなど実感するひとつに、行政懇談会があります。会場のムードが昨年までと打って変わり、出席者も多く市民からの発言は前向き、建設的な意見が多く出されました。建設的な意見に対しては真摯に受け止め、施策に生かしてまいりたいと存じます。

もうひとつは、今年度になり、市外からの視察団が急増していることでもあります。以前は、行政視察のルートとして、お寄りになっていたケースはあったとのことですが、現状の視察は目的を持って、時間を多く取っての視察が、遠くは東北・北海道からも単独でおいでになることも少なくありません。

主な視察目的は、宇城市が掲げております3K政策（健康・教育・環境）と3大改革（意識・行政・財政）の取り組みであります。視察者数は、この半年で18件、135人の方に訪れていただいております。徐々にはあります。宇城市が知られつつある表れであろうかと存じます。また、28日には、「災害時に



MRI 等保健事業の視察

おける物資供給・支援活動に関する協定」の調印式も行われました。今回の呼び掛けには、市内外から14事業所が名乗りを上げていただき大変感謝しております。詳細につきましては、次回広報紙でお伝えしていきたいと思っております。今後、安全・安心な防災に強いまちづくりの構築を目指して、突き進んでまいりたいと思っております。

注目される宇城市、市民が誇れる宇城市を行政と市民が協働して実現してまいりましょう。皆さまのご参加とご協力をお願いします。

※平成20年1月の市長談話室は11日金の予定です。参加ご希望の方は、総合政策課（☎3211803）へ12月20日休日までお申し込みください。

# 市民レポーターの目



## 太鼓の響きに誘われて

瑞穂 その

どこからともなく太鼓のリズムミカルな響きが聞こえてきました。音のする方へ車を走らせると、鳥居の先に大きな茅（かや）の輪が目に付き、うっそうとした木立に囲まれた境内では祭事が行われていました。

7月24日、古保山神社の夏の太鼓。拝殿の中では太鼓、ジャガデインに合わせて子ども神楽舞が行われていました。神職7年目の宮原洋介宮司に



お聞きすると、今日17回、明日16回、計33回の神楽舞を奉納することとのこと。今年初めて奥村和雄区長ほか、有志の手で茅の輪を作られたそうです。境内には2カ所、湧水があり、今まで水が枯れたことはなく、社（やしろ）はスギ、ヒノキ、クスノキなどの大木に囲まれ、夏の暑さを感じさせない場所でした。古保山神社は伐木の年輪、その他の考証などから、今から500年くらい前の室町時代に建立されたと推定され、祭神は菅原道真公。歴史の古い神社です。夏の太鼓、秋の太鼓、花見、観梅グラウンドゴルフ大会、夏休みのラジオ体操などが区の行事として行われており、古保山神社は区民の交流の場となっています。

府で神事を行った際に、寒中にも関わらず無数の蜂が襲来して参拝者を悩ませたが、そこに一群の「ウソ」鳥が飛来し、蜂を食べて人々を守ったという言い伝えから「天満宮の守護神」とされています。そのため、身を守ってくれるようにと買う人もいて、符は祭りに欠かせないものになっています。どこの地域で同じだと思いますが、「年々、子どもの数が少なく、神楽の伝統を継承していくのは難しい状況です。今後は、女の子も視野に入れながら検討していきたい」と宮原宮司は話されました。



# 東京見聞録

市派遣職員が、今の仕事や市外から見た宇城市の様子を報告します。今月は熊本県市長会東京事務所の野村烈さんです。



京王線府中駅付近にある直売所

全国の生産物、特産品が集まる東京で、ひととき異彩を放つお店を見つけました。

考えてみると、2つのポイントがあるように感じます。まず「輸送距離が短い」こと。輸送距離が短いほど、収穫の時期を食べごろに近づけることができる。商品劣化のリスクを低くすることができ。つまり、取れたての食べごろを提供できるというメリットがあります。次に「ストーリー」。ただでさえ関係希薄な都会において、付き合いはなくても、近所の農家が写真入りで紹介され、その人がどう作ったかを書いた説明文とともに野菜が売られている。「あの人がこう作った野菜なら買いたい」と思うに足るストーリーがそこにあります。「取れたて」という価値に加え、「誰が、どう作ったか」。消費者においしさだけでなく、「あなたの野菜を買いに来た」と言わせるに十分なストーリーを提供し、両者の間に信頼関係を築くことができる。生産者による直売は、作り手と消費者を近付ける究極の形かもしれません。



正午過ぎには行列ができることも

「府中特産品直売所」東京の特産品って？と疑問に思いつつ店内に入ると、熊本でもおなじみの風景。ダイコン、ニンジン、キャベツ・・・特に目新しいものはありません。近くには大手スーパーなどが立地する悪条件の中、品ぞろえで格段に劣るこの直売所は、開店から数時間でほとんどの商品を売り切ってしまう超優良店でした。店内は活気付き、客であふれ、開店早々にレジへ向かう大行列ができてしまう。しかし、なぜ・・・と

# アレキサンダー・トウイグ先生の日本つれづれ日記



## 日本に来て思っていること

私は、以前からずっと日本に来たいと思っていました。だから、8月に日本に着いた時は、来られたことが嬉しくとても興奮しました。

日本に着いてから、たくさん新しい経験をし、また日本人だけではなく皆さんの新しい人に出会いました。皆さん、とてもフレンドリーで、ほとんどの人は私が日本語を話せないことを分かってくれます。でも、できるだけ早く日本語を話せるように勉強を頑張っています。

南アフリカと日本の生活を比較すると、違うところがたくさんあります。例えば、日本の公共交通機関は非常に良く、放課後に一生懸命部活動をしている学生にとって、とても便利なおに驚いています。一方、南アフリカの公共交通機関は不便で限られた学生だけが部活動に専念できますが、日本のように毎日会ったり練習したりすることはできません。また日本の生徒は、学校をよく掃除し、とても賢く、何も言わなくてもよく分かっていると思います。

南アフリカや私が行ったことのある国と日本を比べ、違いを見つけることはとても面白いです。しかし、より面白い発見は、わずかな違いが重要ではなく、世界中の人々は、なんと似ているのだろうかということです。私は、すでにたくさんのお話を日本で学びました。そして、ここでの残りの時間、もっと学べることを楽しみにしています。